



知りたい弟は、「農業の資本主義化」、「従属理論」、「緑の革命」、「村落構造」、「信仰体系」、「家族・親族構造」、「開発行政」などについて、田舎の食堂などでビールを飲みながらよく話し合った。弟は、兄の知識の深さにいつも感心させられた。

兄も弟も日本の片田舎で育ったせい、タイ農村での生活にも苦はなかった。二人はパーカーオマー（腰布）を巻いてはいたが、ほぼ裸でよく椰子の木陰で昼寝をした。運河や池で泳いだり、蚊帳を吊って寺院の固い床に寝たり、林の中に排便に出かけたりもした。唯一兄が身近に必要なのは酒であった。調査の合間には、朝でも昼でも飲むことがあった。

弟と少し異なり、兄は物静かな性格であった。もっとも、タイの田舎では踊りに興じたりしたこともあった。また、村人と一緒に酒盛りをよくした。そうした時の兄の顔は生き生きとし、微笑んでいた。東北タイからの出稼ぎ者の調査でラヨンに出かけた際には、少し疲れをとろうと部屋から浜辺に出られる高級リゾートに泊まり、夜間海に出て遊んでいたらクラゲに刺され痛い思いをしたが、「我々には高級リゾートは似合わないな」と兄弟で大笑いしたのを忘れることができない。

ここでは紹介しないが、1976年から1997年までの北原さんとの二人三脚によるタイ農村調査研究は大きな成果をあげたと思う。もっとも、二人三脚とはいえ、その成果の多くは北原さんに負っており、弟である私は兄に付いて行ったに過ぎない。そして、この20年間に及ぶ二人のタイ調査研究には大勢の若いタイ研究者が参加しそれぞれが後に立派に成長していったが、そのことを晩年の北原さんはとても喜んでいていた。

最初に手掛けた農村調査の成果を取りまとめた『タイ農村の構造と変動』（北原淳編、勁草書房、1987年）が出版されたころには日本とタイの関係が大きく進展し、あちこちの大学でタイ語やタイ研究の科目が誕生し、タイ研究者が急増し研究テーマも細分化していく状況が生まれつつあった。北原さんと会うたびに、タイ研究者が集い互いに評価し合い研究水準を高めていく装置（学会）をつくる必要があるのではと話し合うようになった。最初から学会組織を発足させるにはまだ機が熟していないということを感じ、国内のタイ研究者をつなぐ緩やかなネットワークとして「タイ・セミナー」を組織化することにした。最少の活動として、1泊2日の合宿研究会を開き研究発表や忌憚のない話し合いを通じて交流するという企画であった。北原さんと準備を重ね、第1回目の「タイ・セミナー」を蒲郡で開催することができたのは1990年であった。以後、二人は世話人として夜を徹してまでタイを語り合う会合を毎年開催することに全力を傾けた。そこには、農村調査を二人でやってきた信頼感があり、準備は大変であったが、楽しい仕事でもあった。

この「タイ・セミナー」が第9回目を迎えた1998年の会合で、二人は学会への組織変えを提案し、「日本タイ学会」を発足させることになったのである。そして、当然のことながら、初代の会長には北原さんが推された。この学会の誕生は、日本におけるタイ研究の発展が国際的にも認知される契機となった。

互いに酔っぱらっていたかもしれないが、私は北原さんと握手をしたのは後にも先にもこの学会誕生の時だけである。「タイ・セミナー」発足以来の苦勞が実ったうれしさが、そうさせたのであろう。1996年にチェンマイで開催された第6回国際タイ学会に北原・赤木の共編で *State of Thai Studies in Japan* と題する日本におけるタイ研究の動向をまとめた報告書を配布することができたが、この編集プロジェクトにことほか力を入れ、住友財団にかけあって出版費を獲得したのは北原さんである。今日の日本タイ学会の基礎固めは北原さんの力によるところが大きい。

北原さんは、アジア経済研究所（1966年～）、神戸大学（1976年～）、名古屋大学（1999年～2004年）、竜谷大学（2006年～2011年）で教育・研究活動に従事したが、神戸大学が23年間で最も長い。神戸大学赴任とほぼ同時に私が勤務していた大阪外国語大学でも講師として招聘し、20年間ばかり教壇に立っていただいた。北原さんの外大出講日に二人で読書会を行なったのも懐かしい【『アジアにおける資本主義論争』（1990、神戸大学文学部）に収めたソンチャイ・ナ・ヤラーの半植民地＝半封建理論に関する論文翻訳はその読書会の成果の一つである】。北原さんは、外大で学生さんに接したおかげで自分のタイ語能力が向上したと、いつも口にしていました。また、評価の高い『共同体の思想：村落開発理論の比較社会学』（1996年、世界思想社）で取り上げたタイの論者のエッセイは大阪外国語大学の授業の中で学生と一緒に読んだものがほとんどであるとも語っていた。もちろん、学生の北原さんの評判はよく、院生などで農村調査にアシスタントとして参加した者もいる。

神戸大学では、自分でも認めているが、ほとんど個人研究室を使用せず、いつもは社会調査室という共同研究室を居場所としていたことで有名である。学生も含めて大勢が出入りする部屋で、雑用から授業準備まですべてここですませていた。雑音の中でも、北原さんは静かに本を読んでいた。私もこの部屋には調査集計などでよく出入りしたが、文学部社会学の居間のような存在であった。北原さんは、自分の姿をさらけ出すことにより、学生に教育をしていたのだと思う。北原さんがフィールドに出たのはタイだけではない。神戸大時代には沖縄や韓国などにも若手研究者や院生を連れてよく調査に出かけており、時折話の中でそうしたフィールドとタイとの比較論が出てくるが多かった。北原さんは教育者としても優れていた。とりわけ、東南アジア研究を志す若い人々に様々な形で手を差し伸べた。日本人だけではない。今や気鋭の学者として活躍しているチェンマイ大学のタイ人教員は、北原さんを恩師だと私に語った。

北原・赤木の兄弟も1990年代に入るとそれぞれの大学で、学内行政に駆り出されて調査研究に割く時間が極端に少なくなった。私が学生部長に任ぜられた1994年ころからは顔を合わせる機会も減り、連絡はもっぱら電話に頼った。当然のことながら、共同作業もできなくなった。そして、二人とも、学内行

政との絡みでストレスを抱え込む生活を余儀なくされていた。電話の話の内容はほとんどが大学問題であった。1998年に北原さんは学内事情もあり神戸大から名古屋大に移ったが、そこで待っていたのもいわく言い難い学内行政問題であり、そこから生ずるストレスは想像を絶するものであったのは間違いない [2003年には、名古屋大学大学院経済学研究科長を務めている]。

しかし、北原さんは、そうした苦悩の中でもタイへの関心を絶やさなかった。名古屋大へ移ったころから、若いころからためていたタイの土地制度・政策史の研究に再度取り組む。フィールドから図書館に場を移し、約10年間暇を見つけてはバンコクの国立古文書館に通い、こつこつと古資料を読み込んでいった。そして、全力を集中して完成させたのが『タイ近代土地・森林政策史研究』（晃洋書房、2012年）である。時々、資料の中のタイ語などについて電話での質問をもらったが、その時の会話のトーンはその昔のタイ農村で交わした兄弟会話とあまり変わりがなかった。「北原魂」が籠ったこの大作は、北原さん自身の身体内の魂（クワン）をも奪ってしまったようである。同書の「あとがき」の日付である2011年10月ころから、北原さんは徐々に心身ともに衰弱していったのである。享年72歳と言えばまだ若いかもしれない。しかし、北原さんは「地域（タイ）研究者」、「教育者」として与えられた「魂」をみごとに使い果たしたのであった。



北原 淳 先生

4月末、私は我々の代表的調査地のひとつであるナコーンパトム県の村落を訪れた。生前から「遺骨の一部をタイへ埋めて欲しい」との意向があったこともあり、奥様とご相談のうえ、北原さんが最もよく通ったタイの故郷であるその村の寺院に納骨することになった。私が村長にその旨希望を伝えると、「そうか、のっぼ（北原さんのことを村ではそう呼んでいた）が村へ帰ってくるか」と喜んで受け入れを表明してくれた。年内には納骨儀礼を行い、北原さんの冥福を祈りたいと考えている。

（大阪観光大学、大阪外国語大学名誉教授）